

## 【奨励賞】

団体名	葛川小・中学校
活動の内容（概要）	KCL プロジェクトとは、地元児童生徒の減少により、統廃合の危機を迎え、存続を願う児童生徒が行っている、地域を知ってもらい〈Know〉、来てもらい〈Come〉、住んでもらう〈Live〉取り組みである。子どもたちを通して発信される地域の魅力が詰まっている。地域にとって子どもたちの取り組みこそ地域の魅力である。小学1年生から中学3年生がそれぞれの発達に合わせた取り組みを段階的に実施し、9年間の連続した総合的な学習の時間を作る。本校は、総合的な学習の時間を軸とし、教科等横断的な視点に立ったカリキュラム・マネジメントの実現を目指している。

### 受賞理由

- 存続を願う子どもたち自らが行う地域をあげた総力戦的なキャリア教育となっている。KCL という地域が望む切実な成果をタイトルに掲げて、キャリア教育で小中連携により実践的に実行して、クラブファンなどの手法も駆使できている。
- 過疎化が進む中、地域発展のための学校存続という切実な願いのもとに関係者が協力し取組を進めている様子が伝わってくる。筏流しのような葛川ならではの活動の他、クラウドファンディングで資金集めを行ってご当地ガチャの設置に挑戦するなど、新しい試みもなされている。こうした様々なプロジェクトが総合的な学習の時間を軸とした9年間のカリキュラムにどのように位置付けられ、キャリア教育にかかわるどのような力が付いていくのか、カリキュラム・マネジメントの側面から連携の工夫などが整理されることで、同じような課題に悩む地域にとってモデル的な取組になっていくものと思われる。
- 小中学校のアントレプレナーシップ教育、総合的・探究的な学びとして、地域資源を最大限活かして魅力あるカリキュラムを編成している。そこには行政・企業・地元産業との協働体制が構築され、まさに「社会総がかりで子どもを育てることが、まちの未来をつくる」と確信し活動する姿がある。少子化・過疎化のなかで、新たな子育て世代が移り住みたいと考えるためには、豊かな地域資源をフルに活用し子どもの学びの質が高いこと、安心して地域で豊かな体験ができることが不可欠であり、そのために地域一丸となって「キャリア教育」の土壌を耕している。
- 学校の存続をかけ、地域を知ってもらい、来てもらい、住んでもらう取り組みで、ぜひ今後も頑張っていたきたいと願っている。
- 「地元児童生徒の減少により、統廃合の危機を迎えている」という特別な状況を背景としつつではあるものの、「学校を中心としたキャリア教育の推進のために、教育関係者と、行政や地域・社会、産業界が連携・協働して行う取組」というキャリア教育推進連携表彰の趣旨に即した実践と言える。小中一貫の小規模校（二級へき地校）としての特性を生かし、地域資源を十分に活用しながら、きめ細やかに児童生徒の発達段階に即しつつ、自己効力感（自己有用感）をはじめとする汎用的資質能力の育成につなげている点も評価できる。
- 地元課題に小人数ながら真っ向から取り組んだ事例である。

## 連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

大津市立葛川小学校、大津市立葛川中学校、大津市教育委員会

【行政や地域・社会、産業界等】

大津市立葛川小中学校 PTA、滋賀南部森林組合、葛川・久多共同推進つなげる会、葛川自治連合会、久多自治振興会、葛川まちづくり協議会、葛川漁業組合、久多漁業協同組合、久多里山協会、京都北山友禅菊

## 活動開始の経緯

【活動開始時期】平成29年～ 【継続年数】5年

平成25年度より「地域のためにできること」をテーマとした懇話会”KT ふれあいの輪”（※1）が毎年実施されている。過疎に苦しむ地域の実情を知った子どもたちが、自分たちにできることを考え、その成果報告を行う場となっている。葛川小中学校におけるアントレプレナーシップ育成（※2）は、KT ふれあいの輪の流れを踏襲した取り組みである。小規模特認校（※3）を目前に控えた平成29年度に行った地域への提案は「情報発信」「商品開発」「イベント企画」を実施していく宣言であった。地域を知ってもらい〈Know〉、来てもらい〈Come〉、住んでもらう〈Live〉取り組みであることから、子どもたちはこの取り組みを”KCLプロジェクト”と命名した。葛川小中学校のアントレプレナーシップ育成は、葛川小中学校を存続させる取り組みである。現状に課題意識を持ち、見出した課題に向けて積極的に挑戦していく姿勢や発想、想像力を高めるものとして、KCLプロジェクトは始動した。

（※1KTとは・・・KATSURAGAWA・KUTA 本校の校区の2つの地域の名称から名付けられた。）

（※2アントレプレナーシップとは・・・起業家精神と訳され、本校の場合、現状に課題意識を持ち、見出した課題に向けて積極的に挑戦していく姿勢や発想・想像力を高めること。）

（※3小規模特認校とは・・・児童生徒の減少により、葛川小中学校をどのように存続させるか、地域と学校、行政との話し合いの場が持たれ、平成30年度より小規模特認校としてスタートする。区域内の児童生徒に加え、大津市全域から児童を募集することになった。）

## 「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

現在、小学6年生は、学区内を流れる安曇川の川原（町居町）で採取できる粘土を使って焼き物を作ろうと取り組んでいる。久多学区に住んでおられる陶芸家、楽吉左衛門さんのお宅を訪ねて、焼き物について学んだあと、そこで成形した作品を葛川少年自然の家で焼く取り組みも行った。中学1年生は、水力発電の会社の協力を得て学校の横を流れる川での小型水力発電開発、また地域の魅力を発信する動画作りを専門家に学んでいる。

中学2年生は、ご当地ガチャに入れるスタンプを京

都の老舗はんこメーカーの協力を得て作っている。また、ガチャ設置の資金集めのためにクラウドファンディングを専門家に教わりながら8月1日から行っている。中学3年生は、昔、地元で行われて



<クラウドファンディングのトップページ>

いた筏流しを再現するため、森林組合の方や、工務店の方に協力してもらいながら、木を伐採したり、イカダの試作をしたりしてきた。7月20日から22日まで琵琶湖を3日間かけて材木を運ぶ活動をすることができた。安全面では、モーターボートの会社、材木の有効利用としてベンチを寄贈させていただくびわこ大橋米プラザなど、多くの方々の協力を得て実現することができた。

#### 「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

小学1・2年生は、生活科で、自然を見つけて写真を集める。写真にはレポーターとして登場する。小学3年生は、社会科で地域の伝統行事を調べる。小4年生は、理科で川や山を調べ、社会科で地図を作る。また、国語科で紹介文に表す。小学5年生は、総合的な学習の時間で地域のためにできることを考える。小学6年生は総合的な学習の時間で、新名物づくりをする。今年度の6年生は、学校林の楓の木から抽出したメープルシロップの活用について考えたり、校区内で採取できる粘土を使った陶器作りに挑戦したりしている。中学1年生は、課題を見出し、取り組みを企画している。具体的には、九州の会社の協力を得て小型水力発電の取り組みを行ったり、地域の魅力を紹介する動画作りを行ったりしている。中学2年生は、企画した取り組みを実行する段階に来ている。取り組み内容は、ご当地ガチャで学校の廃校危機を救いたいということで、ガチャに入れる葛川の自然の絵柄のスタンプやストラップを作っている。また、ガチャ設置の資金を集めるためにクラウドファンディングを8月1日から行っている。中学3年生は、地域とつながる段階として、自分たちが間伐した杉の木を使って筏を組み、びわ湖イカダ旅を行って水文化を発信した。小学生の間に学区の魅力を徹底的に味わうことで自分達にできることを考え、中学生なって実行するという9年間を見通した活動である。また、卒業した後は、継続して取り組みが続くよう引き継ぐことも行っている。

#### 「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

地域の願いは、葛川が発展することである。そのためには、学校が存続し移り住んできた人が子どもを通わせることのできる環境を整える必要がある。そのために地域を知ってもらい〈Know〉、来てもらい〈Come〉、住んでもらう〈Live〉取り組みKCLプロジェクトを行っている。児童生徒の活動は、地域の願いの体現である。児童生徒は、自分たちの活動が自分たちの楽しみの・だけではなく、地域のため学校のためになっているという有用感、地域の人がよるこんでくれるというやりがい、自分たちが、今やらなければならない活動であるという使命感などを感じながら取り組んでいる。葛川小中学校PTA、葛川自治連合会、久多自治振興会の方に取り組みを報告する、「つなげる会」では、小学6年生から中学3年生までが取り組みを報告し、活動のための協力金をいただいている。実現のために必要なことを教師にたよるのではなく自分たちの力で一つ一つ解決しながら進めている。



<びわ湖イカダ旅>

#### 「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

中学3年生は、7月20日から22日までの3日間でびわ湖イカダ旅を行った。ゴールの米プラザには、在校生の児童生徒保護者、卒業生、地域の方など、葛川にゆかりのある多くの人が集まった。全校生徒38人の小さな学校の中学3年生3名の夢が本当に実現したというニュースは、多くのメディアに取り上げられ、学校を存続させたいという願いを広くアピールすることができた。また、いか

だはその場でベンチに作り替えられて米プラザに寄贈された。ベンチは、道の駅、米プラザを訪れる人にこれから先、葛川小中学校の取り組みを語り継いでくれることだろう。

活動を続けていく中で、多くの機関から取組の発表の機会をいただくことができた。児童生徒たちの取組んだ成果が校内で終わることなく外に向けて発表することにより客観的に振り返る機会となり、社会に出たときの貴重な体験となっている。

#### **学校現場の評価・感想・コメント**

総合学習の中で行っている活動である。毎年シナリオがあるわけではない。本校で出会った教員と児童生徒が作り出す活動である。何も無いところから生み出すことは大変労力がある。すぐに結果が出ないこともあり、我慢も必要である。しかしながら、その学年のそのメンバーでしか思い描けない活動、その時にしかできないことに取り組むことに魅力があり、児童生徒の生きる力となっていると感じている。

#### **関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど**

葛川・久多共同推進つなげる会の報告を聞かれた方の意見

先生が強制するのではなく、児童生徒のみなさんが考えた活動になっているところが良いと思う。